

中野孝次氏追悼

逝くにも勁く

秋 山 駿

中野孝次死す。衝撃だった。彼が逝った、ということが、いまもって肺腑にしみ込んでこない。

ある文学的な問題で、私は中野さんに聴きたいこと、相談したいことがあった。この五月に葉書をもらったとき、その字が、私が書くものよりよほど達筆で、勢いがあるので、ああ元氣なのだ、もうじき快復したら会おう、と思っている矢先の訃報であった。

実は、私はいまも、その問題について、一緒にお酒を呑んでいるときの顔ではなく、あの無明塾で講演しているときの端然たる中野さんの顔に向けて、問いを発し、何かを聴いている心持ちになっている。

中野さんの墓は、浄運寺にある。あるとき中野さんが、おれが死んだら散骨にしたい、おまえに頼む、と言うので、ああいいよ、引き受けた、と私も言っていた。

その話は、記憶が判然としないけれど、たしか中野さんが無明塾へと足を運ぶ始めの頃、同行する私が、「浄運寺は亡き母の生家なんだよ」

「へーえ、そうだったのか。おまえはお寺の子なんだ」とか、語り合っているときだった。

私はこっそりこの話を、従弟の、小林寛雄和尚に打ち明けて、中野さんはあんなことを言っているが——墓は、実は（中野さんが思っているより）深いものだ。日本人にとつて深いものだ。墓は、先祖に話しかけるものだ、先祖を通して永遠とか無限とかいったものに話しかけるものだ。一個人の思想を遙かに超えた深さがあるのだ、とか語り合った。

その後の無明塾のあるとき、中野さんが、不意に突然、おれは浄運寺に墓を造ることにした、と言う。散骨の記憶の残っている私は、ああ、そうかい、と聞き流した。

再びその後、無明塾へと同行する列車内で、今日はこれを持って行くのだ、と札束を見せる。それは何？ 墓石を造る石屋さんに現金を渡すのだ、おまえは一緒に居てくれ、と言う。

そのとき、私は実に弱った。ああ中野さん、わるかった、あなたはこれほど真剣に本気でお墓に取り組ん

でいたとは、と内心で赤面した。

中野さんの墓は、浄運寺のとても見晴らしのよい墓地にある。見事なお墓だ。

私は思うが、中野さんのお墓を造る意思は、この浄運寺が無言に伝えるもの、和尚さんの話、それから何よりも、あの中野さんの話を一生懸命に聴き入る多くの人々の姿が、育



無明塾で講演される中野孝次氏

くんだものではあるまいか。

この三者が合体するところに、日本人として生きて在ることの、一つの生命の髓を見、その髓が低声にささやく声を、自分の心の内胸に深く沈潜させていったのではないか。

中野さんの葬儀のあとで、私は無理を言つて、中野さんから覚雄和尚

さんへ、墓を造る上でのさまざま望を記した、手紙を見せてもらった。

一九九七年の消印がある。ああ、そんな頃から一歩ずつ着実に進めていたのか。私は知らなかった。中野さんも和尚さんも、よくも黙っていたものだ。

お墓での墓碑の位置、字は上から十二センチあける、とか、簡単な図を書いての説明もある。

墓誌表側に彫る文を、自分の筆で清書した見本がある。

むろん、墓誌の長い文も、(空白)日没ス享年(空白)と結んで、そのまま写せばよいように、端然と清書されている。

私が一番びっくりしたのは、やがて彫らねばならぬ、年、月、日について、その数字の書き方の指定であった。

一九〇〇年代没と、二〇〇〇年以降没とでは、書き方が異なる。それから、和数字の字体。

一、二、三、……十の数字を、七つずつ並べて書き、そこから自分の気に入った字を選ぼうとしている。

また別に「百、千、有」を書く。ああ、中野さん。あなたは、そんなに早くから、自分の死の姿を見極めようとしていたのか。あなたは、勁く生き、逝くのに勁かった。

(文芸評論家)